

書評

中村圭著 『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』
(勁草書房 2019)

原田 忠直

はじめに

著者・中村圭は、本書を、社会学と経営学の視点から描いたとする。それゆえ、主に中国経済を研究する私が書評をしたために躊躇いがないわけではない。もっとも、私自身「経済学者」という強い自覚を持ち合わせているわけではないが、少なくとも社会学、経営学とは無縁な存在であることに間違いはない。門外漢が、書評を書くことに如何ほどの価値があるのかと問われれば困ってしまうのも事実である。単なる出しゃばりに過ぎないと後ろ指をさされれば、「その通りである」と答えるほかない。しかし、出しゃばりたくなるほど、本書は面白く、実に刺激的である。ただし、興味本位だけではない理由として、次の2点を挙げておきたい。

第1に、本書の根底を支えている「包」論についての著者の指摘、たとえば、「「包」が重層的に組み込まれた社会経済システムは、中国で起こっている現象を説明するための有用な概念である」(p.194)、「「包」と親分/子分型組織は、チャイニーズ社会を分析するための重要な枠組みの一つだと筆者は確信している」(p.195)という考え方に強い共感を抱くからである。私も2008年頃から「包」についての研究を進めているが、本書のような「包」論を扱った研究の出現を喜ばずにはいられないし、五里霧中のなかで友軍に出会い大切な水を分け与えられたような感覚である。すなわち、この友軍に対して敬意を示し、「包」研究者の一人として、「包」論をより発展させたいという思いが、筆をとった一つ目の理由である。

第2に、本書は、中国研究者による中国研究にほかならないのだが、時折、著者の背後から日本人の顔が現れる。「あとがき」に示されている経歴から判断して、著者は、私と同じ時代、すなわち「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と世界から称賛された時代を「若者」として生きた研究者の一人ではないかと思われる。もっとも、私のようにバブル時代を貧乏院生として過ごしていたわけではなく、その若き日々を最先端のベンチャー企業の経営に携わりながら世界を飛び回っていたようである。まさに私からみれば「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の体現者そのものである。しかし、著者は、その称賛のなかに埋没することなく、かなり早い段階で「ジャパン・ア

ズ・ナンバーワン」の「終わりの始まり」を感じ取っていたのではなからうか。著者は、本書の最後を日本的経営の特徴ともいえる「正社員雇用」や「終身雇用」を「信仰」という言葉で括り、「ガラパゴスなのだ気づくことは、自分たちのありかたを相対化してくれる」、「自由にしてくれる」(p.204)という言葉で締めるが、その背景には、世界を知る日本人からいつまでも過去の称賛に浸っている日本人への痛烈な批判を読み取ることができよう。このメッセージとは、本書の裏テーマにほかならず、かなり強烈でもある。ただ、同時代を生きる研究者として、このメッセージに強い共感を抱くとともに、「終わりの始まり」の次の世界を考えてみたくなった。これが二つ目の理由である。

さて、このような理由を念頭に入れ、以下、中国研究者の視点から本書の方法論とその意義について(), 「包」の研究者の視点から本書で紹介された「包」にかかわる事例について(), そして、最後に、同時代の研究者の視点から「終わりの始まり」のその先を語る意義について(), 少々偏った視点からではあるが、書評を試みたい。

． 本書の方法論とその意義

本書の構成は、「ミクロ」(3章)、「メゾ」(4章と5章)、「マクロ」(6章)の3つの視点から描かれ、終章において、本書のタイトルに示された問いに対する答えが用意されている。

まず、「ミクロ」では、ある一人の女性のライフヒストリーが丁寧に綴られる。次いで「メゾ」では、企業の経営陣に焦点を当て、中国的な経営スタイルが語られる。ただし、「ミクロ」と「メゾ」は、それぞれが全く異なる次元の話ではなく、「ミクロ」で描かれる一人の女性と「メゾ」で登場する経営者がシンクロし、それぞれの思惑が絡み合いながら、青島市のアパレル業界及びアパレル会社(国有企業)の実態が明らかとされる。ただし、その描写は、単なる産業・企業分析の域を越え、そこに生きる人びとの吐息が行間から零れ落ちてくるようでもある。

この「ミクロ」と「メゾ」の分析において臨場感が満ち溢れる要因は、その「主語」が明確であるからにほかならない。あるいは、「主観」が見事なまで描かれているといった方が適切だろう。社会学では、このような手法は当たり前なのかもしれないが、それにしても著者は、実に、調査対象者の「主観」を深く語らせている。ただし、研究者とは、人びとの「主観」をどれだけ並べたとしても、たとえそこに深みがあったとしてもなかなか満足することができないだけでなく、「客観」という言葉にいつも悩まされ続ける生き物である。たとえば、研究会や学会で事例研究を発表する時、「客観性はどこにあるのか?」というフロアーからの質問に対する準備を怠ることはできないし、自分が目にしてきた「小さい事実」を少しでも大きく見せるために、「客観的にいえば」という言葉を繰り返す。または、そのような質問の恐怖から逃れるため、予め「この発表は一つの事例分析です」と防波堤を巡らせることに努めてしまう。しかし、本書には、そのような怯えはない。つまり、本書は誰かが唱えた「客観」を借り、それを論証するために都合の良い事実を現場でみつけ並べたものではなく、どこまでも「主観」が貫徹している。

ハイエクはいう。「ともかく「出かけて行って見る」というのが社会現象の研究者の第一本能であると信じることは、もちろん誤りであろう。通俗的な言語によって実在が仄めかされているような全体を直接探し求めても、それが何処にも見当たらないことを社会現象の研究者が修得するのに、はっきりとした長い経験を要したことは知られている」(ハイエク 2004 p.83)。この指摘を端的に言い直せば、通俗的な言語しか持たない研究者が、すなわち、借り物の「客観」を携えて現場に足を踏み入れても、何も掴み取ることはできないということであろう。

もちろん、著者も、私を含め多くの研究者がそうであるように、初めて中国を訪問した時、通俗的な言語しか持ち合わせていなかったかもしれない。しかし、中国での現地調査で知り得た情報を整理するなかで、通俗的な言語では説明できない世界に遭遇したのだろう。それはまさに苦悩の始まりであったに違いない。ただ、そのような苦悩のなかで、著者は、中国とは無縁とも思えるような数多くの本を読み漁ったのではなからうか。そして、ポランニーに出会い、「社会に深く埋め込まれたもの」という言葉を一つの手がかりとして、新たな探究を始めたのだろう。いうまでもなく、その探究とは、調査対象者たちの「主観」の源泉を探るものであり、著者の身体に纏わりついた通俗的な言語をその身から剥ぎ取り、自らの「主観」形成の過程であったといえる。つまり、通俗的な言語ではなく、著者自らの「主観」で調査対象者を捉えた時、調査対象者の言葉に「命」が与えられることになったといえよう。そして、このような研究方法を貫いたがゆえに、「マクロ」の視点としての第6章を書き上げることができたのではないかと思われる。無論、この「マクロ」の視点とは、その過程において著者の「主観」が幾度も化学反応¹を繰り返し生まれたものであり、正確にいえば、著者の(現時点における)「主観」の集大成といってよいであろう。もちろん、だからといって、本書は独りよがりの結論を提供しているわけではない。私からみれば、「マクロ」の視点で展開される「社会に深く埋め込まれたもの」としての「包」論から調査対象者の「主観」を捉え直し導き出された結論に高い「客観性」を認めるし、その理由は、化学反応の痕跡をしっかりと確認することができるからである。それゆえ、本書の一つの結論、タイトルに示された『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』という問いに対し、人材流出とは、中国的な「合理性」に基づく結果であるという回答はストンと腹に落ちるのだ。

以上、本書の研究方法についてみてきた。「ミクロ」と「メゾ」の詳細な調査を遂行することだけでも高い評価が与えられて然るべきであるが、著者の探究心は、そこに留まっていたわけではない。むしろマクロの視点から読み解くその手法を築き上げた点こそがもっとも評価されるべきであろう。とくに、研究者は、事例研究を広げてみせることに満足せず、著者の研究スタイルを見習うべきである。そうでなければ、いつまでも上述したハイエクの批判を乗り越えることは

1 化学反応という言葉は、社会学者・小熊英二の対談集『真剣に話しましょう』からの引用。小熊は、物書きの資質、あるいは研究者のあるべき姿について、「その作品を作る過程で著者自身が変化していったり、化学反応を起こしているものが好きなんです。そういう化学反応がない人は、何を書いてもみんな同じになってしまう」(小熊英二 2014 p.11)。小熊の指摘通り、何を書いても同じようにならないように心がけたいものであるし、変化、化学反応を探することは研究者の基本の一つであろう。

できない。

・「包」の視点から

「包」という一つのシステムが、中国経済・社会（及び経営）において重要な役割を担っているのではないかと結論づけることは、現地調査を繰り返し、直感的²に掴み取る以外に方法はない。ただし、ひとたび「包」という核心を掴み取ったとしても、それを論証することは決して容易ではない。多種多様な統計年鑑をどれだけ読み込んだとしても、中国社会における「包」の浸透度やそれが果たす役割など、その実態を明らかにすることは不可能である。それゆえ、「包」の論証とは事例を積み上げていくしかない。しかし、中国研究者であれば現地調査を実施することは難しくないとしても、「包」に関する事例を拾い集めることは簡単ではない。

ところが、著者は、私からみれば、もっとも調査するのが難しいと思われる国有企業を対象とし、「ミクロ」、「メゾ」の視点からそれぞれ有益な情報を引き出している。まさに本書は、「包」を論証する上で一級資料にほかならない。とくに、これまでの「包」研究（経済学者に限定的であるが）を振り返ると、本書のように企業内部まで踏み込んだ研究は少ない。たとえば、加藤弘之³の研究をみても、土地の集団所有、市場競争のメカニズム、混合所有企業のガバナンス、中国式イノベーション、対外援助などといったテーマについてのかかなり大まかな事例が紹介されているに過ぎない。言い換えれば、「主語」なき事例の積み重ねという印象は拭えない。それゆえ、「包」を実感し、理解を深めることは難しいといわざるを得なかった。繰り返しになるが、こうした現状を打破したという意味で、本書の意義は計り知れないものがある。実際、本書には「包」研究に直接繋がる記述が散りばめられている。本来であれば、それらを一つ一つ拾い上げ検討すべきであるが、紙幅にも限りがあり、ここでは、アパレル製造貿易会社（国有企業）の社長の言葉を取り上げたい。社長は自らの仕事内容を次のように説明する。

「請負制になった後は、私は何もしなくてよい。今は任せているのでプロセスを見る必要はな

2 直感とは、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』（岩波書店）の次の一文をバックグラウンドとしている。「情熱はいわゆる「靈感」を生み出す地盤であり、そして「靈感」は学者にとって決定的なものである」。これは尾高邦雄訳によるものであり、直感「靈感」と訳されている。ただし、三浦展訳（2017）では、「靈感」は「直感」または「ひらめき」となっている。また、三浦訳では、「情念は「直感」という決定的なものを生み出す前提条件です」となっていて尾高訳とは異なる。原文（ドイツ語）では、尾高訳にある「そして「靈感」は学者にとって決定的なものである」という文章、とくに「学者」という単語は存在しない。つまり、三浦訳の方がより原文に近い。尾高訳は明らかに意識である。しかし個人的には研究者に直接問いかける尾高訳の方が気に入っている。

3 加藤弘之（1955～2016 愛知県出身）。1979年3月大阪外国語大学卒業。1981年3月神戸大学大学院経済学研究科博士前期課程修了、1982年3月神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程退学。1982年4月大阪外国語大学助手、1985年4月神戸大学経済学部専任講師、1996年4月同助教授、1997年4月同教授。2006年4月-2007年3月外務事務官（在中国大使館公使、アジア政経学会理事長（2007年-2009年）などを歴任。

く、結果だけを見ればよい。中国人の管理は、結果を見る管理であり、管理者にとってプロセスはほとんど関係がない」(P.101)。

この言葉を取り上げる理由は、国有企業までが「包」的経営を行っている事実を示す点で非常に重要であると受け止めたからでもあるが、その他、「包」研究者として知られる柏祐賢⁴や加藤弘之が明らかとした「包」の諸機能の多くが語られているからである。たとえば、「私は何もしなくてよい」という言葉の背後には、社長がこの会社の営業課のリーダーへ「仕事を丸投げしている」という事実が隠れている(2011年当時18の営業課が存在していた)。そして、この営業課リーダーは、課内の「跟单」⁵と呼ばれる人びとに仕事(発注されたデザインの仕様書に沿って原材料の発注、製造工場での加工、検品、通関の手続きなどの一連の仕事を行う)を任せる。いうまでもなく、ここに柏や加藤が指摘した「包」の「寄生的性格」や「多層化」という構図を容易に発見することができる。さらに、「結果だけを見ればよい」という言葉には、営業課リーダーに「自由裁量権(労働裁量権)」が与えられている実態が浮かび上がらせたといえよう。このように他人任せな「寄生的性格」、請負い構造のなかで人びとが数珠繋がりになっていく「多層化」構造、そして、たとえ社長(上司)であっても「プロセスには口を出さない」という営業課リーダーに「自由裁量権」を与えることは、まさに「包」そのものである。

周知のように加藤弘之は、上記の「包」の機能のなかで「自由裁量権」に着目し、改革・開放政策後における中国経済成長の背景を解き明かそうとした。そして、その源泉を次のように説明する。

「組織の中と外、あるいは組織内での上下の命令系統の如何にかかわらず、請負契約の当事者である投資者Aと経営者B、経営者Bと社員C、社員Cと小売店主Dとの関係は対等・平等である」と定義する(加藤2016 pp.50-51)。そして、「投資者Aと経営者Bとの関係を取り上げると、所有権理論によれば、「残余コントロール権」(企業資産を自由に処分することができる権利)は所有者にある。したがって、Aに残余コントロール権があるはずであるが、中国の場合には、残余コントロール権がAになるのかBにあるのかは「曖昧」なことが少なくない。投資者Aは、残余の処分について経営者Bの決定に口を挟むことはできず、AはBから利得の一部として配当を受けるという関係に近い場合も普遍的に見られる」とし、さらに、経営者Bと社員C、社員Cと社員Dの関係も同様に、「上下の命令関係や下請関係とは異なる、相対的に対等・平等な人間関係が存在している」とする(加藤2016 p.50)。

少々長く引用してしまったが、簡単にいえば、投資者と経営者における残余コントロール権は

4 柏祐賢(1907~2007 富山県出身)。1933年京都大学農学部卒業。その後、農林省、京都大学助教授を経て、1947年に京都大学教授。1971年京都大学定年退官。同年、京都産業大学経済学部教授。1978年から京都産業大学学長。2007年死去(なお、略歴及び著作目録の詳細は『柏祐賢著作集』第25巻に掲載されている)。

5 「跟单」とは、「秘書や経理と同様、中国の貿易業界ではごく一般的な職種として認知され」、「1取引について最初から最後まで責任をもって完了させる取引責任者」を指す(pp.104-105 参照)。

「曖昧」であり、「曖昧」であるがゆえに両者の関係は水平的となり、それゆえ「自由裁量権」が生まれ、インセンティブは高まり、その結果、経済成長が達成されるという説明である。いうまでもなく、ポイントは「曖昧」という言葉である。

著者も、本書でこの「曖昧」という言葉を次のように使う。

「組織に属するという意識は総じて希薄であり、個人と企業/組織の境界線は状況に応じて非常に曖昧なものがある」(p.6)とする。著者は、加藤と同じく、中国社会に「曖昧な側面」を見出しているといえよう。ただし、著者は、「曖昧さ」の源泉を加藤よりもより具体的に説明する。

「企業と人材の関係は、跳槽という社会的行為を介して、いわゆる「支配」-「被支配」の関係ではなく、時に対等であり柔軟性のある関係となっている」(P.154)。ここでいう“跳槽”とは、単に「転職」という意味だけではなく、「起業」するびとも含み、人材が流動することを指している。そして、“跳槽”が常態化するもとの、個人と企業/組織の境界線は「曖昧」となり、その結果として、「支配」-「被支配」ではなく(上下関係)、「対等」(水平性)に基づく「自由裁量権」が生まれるということである。

このように著者や加藤は「曖昧」という概念から「自由裁量権」を語るのだが、果たして「曖昧」という言葉で「自由裁量権」、さらに「包」を語ることができるのだろうか。少なくとも内山完造⁶は、「包」を次のように定義する。少々長いが引用したい。

「中国の習慣の中に包という制度があって、日本語には請負制度と訳されて居る。間違いではない。土木、建築、修理その他何でもこれだけの場所にこれだけの事を何日間に仕上げて何程でするかと云う風に何でも請負わせるのである。甚だしいのは包医と云って、医者が病気を請負うて治すと云うことまでである。三度の食事を仕出し屋が請負うて包飯というなどは、何の不思議もないことである。この包を請負と訳して居るが、私はもう一步踏み込んで区切ることであると云うのである。一戸の家は一つの区切りである。一つの市街に城をつくる(武装と云うことも出来る防壁と見ることも出来るが)大陸地帯での区切りである(村落の堡とか壘とか云う土を堆くしたのも同様)、国境線は大陸の大区切りである。こう考えて来る時に、中国人は中国人として生きる為には、先ず区切りからやらねばならぬ。ここに中国人が何事にも客観を先ず重視して、その客観との調整の範囲内でのみ主観を考えた、むしろ宿命とも言われる民族的習性がうなずかれるのである」(内山 2011 pp.60-61)。

このように内山は、「包」を「区切る」と表現する。より具体的にいえば、「包」とは、土を堆く盛り「境界線」を作り、他者との区切りを大前提とする捉え方である。まさに「曖昧」とは真逆な考え方である。

「曖昧」か「区切り」か、いずれが「包」の核心に迫るものであるのか。この点を考察するこ

6 内山完造 (1985-1959)。内山書店の経営者。魯迅との親交も深く、著書『生ける支那の姿』(1936年出版)の序は魯迅によってしたためられている。なお、本文の引用文は、『両辺倒』(2011)によるが、この本で展開される日本人との違いに基づく内山の中国人観は中国研究者にとって必読である。

とは、「包」を理解するため、または中国社会の実態把握には避けて通ることはできない。しかし、本格的な考察は別の機会に譲り、ここでは、本書において著者が、提起した「労働者とは何か」という問題に即して分析を試みたい。

著者は、石清の分析を援用しながら、改革開放以前の奉仕精神に覆われた「労働」から改革開放以降における「契約制」へ、さらに、“跳槽”が常態化するなかで、「労働者とは何か」の再考の必要性を説き、それを試みている。この自問にも似た問いに対する著者の回答は、まず、「雇用されている労働者ではない」としたうえで、「人間関係資本蓄積の過程の行為者」とする。この定義を私なりに解釈すれば、“跳槽”を繰り返す、広い人間関係を形成するなかで、情報、知識、技能などが蓄積された人びと（行為者）を指しているのではないだろうか。また、蓄積された能力の量・質が高まることによって、雇用者は彼らを単に被雇用者と位置付けることができなくなり、その能力に応じて与えられる「自由裁量権」の大きさも変わってくるということであろうか。

このような私の解釈はそれほどの外れではなく、“跳槽”を繰り返す人びとの特徴ではないかと思われる。しかし、「社会関係資本蓄積の過程の行為者」とは少々長すぎて分かりにくい。もう少し簡潔な名称が必要ではないだろうか⁷。そもそも著者は、自らが見出した人びとに新しい名称を与えることから始める必要があったのではないだろうか、と思わざるを得ない。「社会関係資本蓄積の過程の行為者」とは、その新しい名称のための説明文にほかならないのではないか。もちろん、この名称をつける作業、または、「包」的に仕事をする人びとをどのように表現すべきかを考察することは決して簡単ではないだろう。少なくとも上述した「曖昧」と「区切り」の概念を無視することはできない。なぜならば、この二つの概念を理解することは、表層的な社会現象を眺めているだけでは理解することはできないからであり、上述した「社会に深く埋め込まれたもの」の視点が必要となろう。つまり、「曖昧」、「区切り」を社会の深いところで捉える必要があるし、「自由裁量権」やその源泉も同じ場所で考察しなければならないであろう。そして、そのような考察を通して、新しい名称は社会の奥深いところから浮かび上がってくるのではないだろうか。今後、著者には是非とも新しい名称を付けていただきたい。

． 同時代研究者の視点から

桑田佳祐は、21世紀初頭、次のように日本の世相を歌い上げている。

“一度は僕らも Hero (だった)。極東の成り金 People. Yes I'm going to keep my faith in you all the time. Ah. 華やかなりしあの頃の、円で勝つ夢は Melt away. 後は修羅場だ。泡沫のようにすべてが消えた...oh” (『ROCK AND ROLL HERO』 (作詞・作曲:桑田佳祐 / 英語補作詞:

7 著者は「セルフマネジメント」という用語を用いるが、「従業員」、「労働者」という言葉からはかけ離れ過ぎているように思えてならない。

Tommy Snyder / 2002年9月22日発売)。いうまでもなく、桑田からみた当時の日本は、すでに「ジャパン・アズ・ナンバーワン」から転げ落ちていた。さらに、この曲の中で“「人災列島」に夜明けは来ない Never never...again”とまで歌う。もっとも、桑田がこのような日本社会を冷笑できたのは、彼の視線の先には転がり落ちる底がみえていたのかもしれないし、その底はすぐに這いあがってくるができるほどの深さであったはずだ。それゆえ、自虐的ではあるが、どこか遊び心が歌詞には残る。ところが、その後、「人災列島」は次から次に想定外の災難に見舞われ、かの名曲『Tsunami』(作詞/作曲：桑田佳祐/編曲：SOUTHERN ALL STARS 2000年1月26日発売)は、人前で歌うことができなくなってしまった⁸。転がり落ちた場所は「修羅場」どころか、歌にすることもできないような世相が広がっている。言い換えれば、桑田は「終わりの始まり」を明確に認識したが、その先の世界を歌いたくとも歌えないのだろう。実際、昔ながらの色恋歌は今も衰えを知らぬが、世相に関しては、どこか歯切れの悪い応援歌が散見できる程度である。

無論、桑田だけの問題ではない。中国研究についていえば問題はより深刻である。なぜならば、いまだに「ジャパン・アズ・ナンバーワン」のお面をかぶった中国研究者は少なくないからだ。無論、彼らは、今なおナンバーワンだと信じているわけではないだろうが、日本的な方法は「正しい」という通俗的言語から中国を覗きこみ続けている。確かに、「正しい」と思い込むだけの根拠は存在した。日本社会は、その方法で豊かになったことは事実である。しかし、この方法が、中国でも通用するという根拠はどこに存在したのであろうか。推測するに、その根拠は、中国経済の「遅れ」や市場の「未熟さ」にあったのではないか。少なくともかつての中国社会のなかに日本社会との差異を発見することは容易であったし、それを埋めるための解決策として、日本の正しい方法を適用すべきであるという考えが生まれたことは自然であったかもしれない。ただし、このような考え方が科学的であったとはいえないばかりか、中国経済の成長に伴い、「正しさ」に対する思い込みだけが時代に取り残されてしまった感は否めない。そして、中国経済の成長と「正しさ」の間に生じた大きな溝は、「理解しがたきもの」または「理解したくないもの」として放置され続け、反中感情を生み出す一つの要因を形成したといえよう。もちろん、その溝を埋めるための努力がなかったわけではない。しかし、そのような努力は、『Tsunami』が歌いたくてもなかなか歌うことが許されない理由と同じく、高くて硬い一つの壁にぶち当たり続けている。もちろん、「正しい」という通俗的言語に縛られ、大きな壁を作った責任を中国研究者だけに求めることはできないが、その責は決して小さくはない。

もしも本書が、遅くとも21世紀の初頭に出版されていたら、日本企業は今なお中国で活躍し続けていたかもしれない。しかし、その実際は、従業員が激しく流動する状況に対して戸惑う日本企業の実態を露わにし、または、自由で競争を基本とする労働市場の成立を目指す制度がいず

8 近年、『Tsunami』はラジオでは流れることもあるという。しかし、40周年記念コンサートが2019年3月末より全国で展開されているが、『Tsunami』は依然として演奏されていない。

れ確立されるだろうという推測程度の研究成果が、申し訳なさそうに存在するに過ぎない。「正しい従業員の在り方」、「正しい労働市場」がいくら語られたとしても、いかほどの意味があったのか疑わざるを得ない。

無論、著者がいつ頃から「正しさ」に対して懐疑的となったのか定かではないが、中国研究を通してそれは徐々に膨らみ、「包」を初めとした「社会に深く埋め込まれたもの」と出会い「正しさ」の限界を知るに至ったことは間違いないであろう。本書は、「正しさ」を論破する一冊であることはいうまでもない。もちろん、それを証明するため、「正しさ」の幻影を引きずる他の研究者への批判は本書のなかでも展開されているが、かなり控え目な印象である。しかし、批判はその程度で充分であろう。ただし、他方で日本の労働者に対してはかなり強烈なメッセージを送る。「正規社員」、「終身雇用」という日本の「正しい」方法を「信仰」と一蹴し、まるでガラパゴス化する人びとに「目を醒ませ」と大きな声で呼びかけているようでもある。このように呼びかけたい気持ちは分かる。中国からみれば、ガラパゴス化した人びとは企業の奴隷にしか映らないし、そのような人びとに何かを伝えたい。

しかし、私は、そのような作業に意味があるのか、と問わずにはいられない。「正しさ」を拒否されたことに対する抵抗は半端ないであろうし、その上、本書の中心的なテーマでもある“跳槽”を日本の従業員ができるほどの能力を持ち合わせているとは思えない。“跳槽”とは、マニュアル、指示・命令を難くこなす人びとが出来るほど簡単なことではない。ましてや「包」のもとで「自由裁量権」を与えられたとしたら、仕事の重圧に潰され、精神を病む人びとが後を絶たないであろう。奴隷のように働くことは、それなりの理由があるのだ。もちろん、著者も、このような事実は重々承知していることであろう。著者の周りを見渡し、いかほどの人が、“跳槽”をし、自由裁量権を持つことに喜びを感じることができるのか、少なくとも私の周りには誰もいない。

それゆえ、私は、著者には是非とも、もう日本を振り返ることなく、本書で明らかにした「社会に深く埋め込まれたもの」から読み解いた中国の実態を、広く世界に問うていただきたいと願っている。これは、私から著者に対する同時代を生きる研究者としてのメッセージである。

おわりに 「包」論研究への誘い

中国研究者に限ったことではないが、中国で生活し、または調査をしていると、そこに日本ではなかなか遭遇できない人びとの姿を発見したことがあるのではなからうか。時に、そのような人びとに対して、違和感を乗り越え、嫌悪感を抱くこともあるが、このような感情を抱けないとすれば研究者として失格であろうし、少なくとも違和感を感じることは、ある意味、中国研究の第一歩にほかならない。そして、「なぜ、違和感を抱くのか」という自問に対して、「包」論は回答を見つけるためのヒントを与えてくれるだろうし、その先に、本書のような新たな世界を広げてみることも可能とならう。

「包」とは、著者が指摘するように「中国で起こっている現象を説明するための有用な概念である」。言い換えれば、中国の社会や経済、さらに経営を理解するためには、「包」の視点は必要不可欠であろう。もちろん、「包」に関する研究はまだ道半ばであるが、逆にいえば、研究すべきことは山積しているといえよう。「包」を研究するものからいえば、著者のような社会の奥深くから中国を見つめる研究者が生まれることを期待したいし、今後、本書に誘発され、「包」研究が活発になることを願いたい。

【参考文献】

- 内山完造 (2011) 『両辺倒 中国人的政治・経済感覚の古層』(長肆心水)
- 小熊英二 (2014) 『真剣に話しましょう 小熊英二対談集』(新曜社, 2014年)
- 加藤弘之・久保了 (2009) 『進化する中国の資本主義』(岩波書店)
- 加藤弘之 (2010) 『移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律』中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』(ミネルヴァ書房)
- 加藤弘之 (2013) 『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』(NTT出版)
- 加藤弘之 (2014) 「中国型資本主義の「曖昧さ」を巡るいくつかの論点 中兼和津次氏の批判に答える」(『国民経済雑誌』第210巻第2号)
- 加藤弘之 (2016) 『中国経済学入門 「曖昧な制度」はいかに機能しているか』(名古屋大学出版会)
- ハイエク (2004) 『科学による反革命 理性の濫用』(佐藤茂行訳 木鐸社)
- 原田忠直 (2011) 「柏史観と「包」の倫理規律」(『日本福祉大学経済論集』第43号日本福祉大学経済学会 pp.1-33)
- 原田忠直 (2013) 「包についての一考察 鄧小平と「擦辺球」」(『現代と文化』第127号日本福祉大学福祉社会開発研究所 pp.183-208)
- 原田忠直 (2014a) 「奇妙な宴会 アーレントは着席するか?」(『現代と文化』第129号日本福祉大学福祉社会開発研究所 pp.119-146)
- 原田忠直 (2014b) 「躓きの石 確定化への誘惑」(『現代と文化』(第129号日本福祉大学福祉社会開発研究所 pp.147-164)
- 原田忠直 (2014c) 「現代中国における「包」と「発展のシェーマ」についての一考察」(『中国社会の基層変化と日中関係の変容』(日本評論社 pp.87-102)
- 原田忠直 (2016) 「農民工からみた中国社会 - ある一枚の写真から読み解く中国社会」(『中国21』44号 愛知大学現代中国学会編, 東方書店 pp.105-128)
- 原田忠直 (2017) 「「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」 柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心」(その一)(『ICCS 現代中国学ジャーナル』第10巻第1号 国際中国学研究センター pp.107-123)
- 原田忠直 (2019) 「「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」 柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心」(その二)(『ICCS 現代中国学ジャーナル』第12巻, 第1号 国際中国学研究センター pp.1-18)
- マックス・ウェーバー (2017) 『職業としての学問』(尾高邦雄訳 岩波文庫)
- マックス・ウェーバー (2017) 『職業としての学問』(三浦展訳 プレジデント社)